

暁の大地
5

成尾
陽

目次

八、綾の聖地 ◆ 7

出会いの地 ◇ 7

初心不可忘 ◇ 17

天満宮と天神さん ◇ 26

綾部へ ◇ 34

天眼通 ◇ 43

この小説は、大本のみ教えをドラマ風に書き下ろしたもので、平成二十二年から二十七年までの機関誌「おほもと」と、平成二十八年以降の「みろくのよ」に連載したもので、登場人物は実在の人物ではありません。

暁の大地
5

八、綾の聖地

出会いの地

「行つてらっしゃい」

みろく会館総合受付の水田春子が、大地たちに明るく声を掛けた。水田は大道場修行前日、大地の修行受け付けをしてくれた女性だった。修行期間中、大地の顔を見ると、気さくに声を掛けてくれ、大地も親しみを覚えていた。

「水田さん、いろいろお世話になりました」

「気を付けてね」

「はい、ありがとうございます」

大地たち修行者一同は、みろく会館ロビーに集合していた。大道場修行の亀岡での全日程が終わり、これから綾部へ向かうのだ。

大道場修行では、四日目、午前中の講座「現代の大本」を受講後、昼食を済ませ午後から、大本のもう一つの聖地である綾部市の「梅松苑」に移動する。つまり、霊国

に相応する亀岡の“天恩郷”での修行を終え、天国に相応する“梅松苑”で、修行の修了を神さまに奉告するのである。

「雨宮君、また来てね」

今回、大地たち修行者の担当をしてくれた坂口満も声を掛けてきた。

「はい、また参拝に来ます」

「明日、修行が終わったら、おじいさんの所へ行くのかな？」

「はい、そのつもりです」

「じゃあ、一緒に歌祭と瑞生大祭に参拝できたらいいんじゃない…、数日後だからね」

「そうですね。それも明日、綾部の梅木家へ行ってから相談してみます」

「そうだね、待っているよ」

「はい、ありがとうございます」

大地が頭を下げた。

「では、そろそろ行きましようか」

徳島から修行に来ている北原剛が声を掛けた。昨夜の「えさ飲ぎの座」（座談会）終了後、大地と丸山誠吉と馬淵光彦は、北原の乗用車に便乗することが、にわかに決まった。

その他の修行者は、JRで移動するため、亀岡駅まで坂口が運転するワゴン車で送ってもらえることになっていた。

「皆さんおそろいのですから、そろそろ出発しましょうか。では、JR組の方は、表の車にお乗りください」

坂口が案内した。

「では、私たちも…」

北原がワゴン車の後方に止めていた車に向かい、大地たちも続いて乗り込んだ。全員が車に乗ると、坂口がエンジンをかけた。

「お気を付けて」

一列に並んだ水田と数人の道場講師、係員らに見送られ、大地たち一行は、真夏の天恩郷を後にした。

「すみませんねえ、北原さん。よろしく願います」

助手席に乗った馬淵がそう言うと、後部座席の丸山と大地も声をそろえた。

「よろしく願います」

「はい、こちらこそ。楽しく綾部まで参りましょう」

ほどなく亀岡駅へ向かったワゴン車と別れ、大地らの車はそのまま直進し、国道九号線を西へ向かった。

「丸山さん、今朝の『現代の大本』の講座の中で、教主さまがエルサレムでのエスペラントによる歌祭を願っておられるというお話がありましたけど、いつ頃あるんですか？」

大地が丸山に訊いた。

「それは私にも分からないけど、平成十七年（二〇〇五）の大本歌祭で、教主さまが『わが願ひエスペラントの歌まつり人類同胞こそりてエルサレムの野に』とお詠みになったのだから、必ずいつかは開催されるはずだよ。本部としてもいろいろ努力しているそうだけど、なにせ中東の情勢が厳しくなっているので、なかなか難しいんだろうね。私がイスラエルに行った時には、合同礼拝もできたんだけど、その直後から情勢が厳しくなったよね…」

「えっ、丸山さんはイスラエルに行かれたことがあるんですか？」

「あるよ。二〇〇〇年の七月だったけど、イスラエルのテルアビブ市で開催された世界エスペラント大会に参加した時に、『エルサレム平和使節団』が結成されて、百三人の団員の一人として参加したんだよ」

丸山が懐かしそうに言った。

「そんな大勢で行かれたんですか」

「なかなか楽しい旅だったよ。ハイファ市という所のティコティン日本美術館で“日本の夕べ”を開催したり、世界大会の前には、エルサレムのオリーブ山・橄欖山かんらんざんの上にある大学の大讲堂で行われた“世界平和祈願祭”に参拝させてもらったんだよ。齋場は祭壇の向うがガラス張りで、エルサレム旧市街が一望できる最高の場所だった。祭典では、ユダヤ教、イスラム教、キリスト教の代表者がそろって玉串捧奠されたし、あの時は感激したな」

「そんなすごいことがあったんですか」

「いや、いい経験をさせてもらったなあ、懐かしいよ。これから行く綾部市とエルサレム市とは、二〇〇〇年の二月に友好都市宣言をしているんで、私もぜひエルサレムでの歌祭には、参拝したいもんだね。もつとも体力が許せばだけどね（笑）」

「丸山さんはまだお若いから、大丈夫ですよ」

「そう願いたいね。その時は、雨宮君も一緒に行かないかい？」

「そうですね、なかなか行ける所じゃないので、状況が許せば、参加したいですね」

大地が答えた。

「そうそう、そのイスラエルへ入るためにエジプトを經由して、そこで時間があつたから、ピラミッドを見学したんだけど、あれはスゴイね。ピラミッドは私が想像していた以上に巨大で、よくあれだけのものを作ったもんだと、心底ビックリしたよ」

「あのクフ王のギザのピラミッドですか？」

「そうそう、一つ一つの石が予想以上にデカイ！ あれは一見の価値ありだね」

「そうなんです。見てみたくなつたなあ」

車は亀岡市千代川町のJR嵯峨野線を越える高架を過ぎ、桂川（大井川）と嵯峨野線の間を併走するように走る国道九号線を進んでいた。左手には田んぼや畑が広がり、その向こうには、小高い山が連なっている。

「そろそろ八木だね」

左隣に座っている丸山が言った。

「もう少しすると右側に川堰ぜきが見えてくると思うけど、その辺りが開祖さまの三女のひささんと若き聖師さま・上田喜三郎青年が初めて出会った場所なんだよ」

「あの『大本の出現』の講座であつた、ひささんが茶店を開いていた所ですか」

「そう、雨宮君よく覚えてるね。私は先輩から、右手に堰せきが見えたら、反対の左手に川の支流が流れていて、おそらくその近くに茶店を開いておられたんじゃないか」と聞いているんだけどね。

ほら、右前に大きな堰せきが見えてきただろう、そして左を見ると……」

「あつ、あれですか」

助手席の馬淵が外を見ながら言った。

「そう、あの辺りに、ひささんと喜三郎青年が出会つた茶店があつたそうだよ」

丸山が説明する間に、景色は変わり、車は八木町内に入った。

過去の『人類愛善新聞』紙上に、「八木・虎天堰とらてんいね」というコラムがある。丸山は、車中でその内容を分かりやすく説明した。

明治三十一年旧六月王仁師は、穴太の北二里南桑田みなみくわだ、船井郡の境界、大井川の清流をひいた虎天堰とらてんいねの傍そばの小さな茶店で、大本開祖の「筆先」に出会う。「このことわかる者、東から出てくる」筆先を信じ、開祖の三女福島夫妻はこの道端に茶店を出し、師

の出現をまつた。

嚴魂^{いづみたま}大本ひらきみづみたま

人類愛善の道をひらけり

八木は二大教祖の最初の出合いの地である。三カ月後、師は綾部行きを決意された。八木町の東北の丘陵からは船井・南桑の大穀倉地帯が一望。南に虎がゆったりと寝た姿の、虎山を拜す。その形はいかにもものどかで、ユーモラスだ。この虎の頭のところに大井川の清流がぶちあたる虎天堰^{とらてんいね}がある。この水口は南桑平野をうるおす生命線で、井関は船井の米・木材が集結され、水運をもって京と直結する、交通の要路であつた。茶店はそこにあつた。

〔人類愛善新聞〕昭和五十七年九月号から

開祖さまと聖師さまがお出会いになるきつかけとなつた場所。そう思うと感慨深いものがあるなあ…、と同乗している三人ともが、心の内に感じていた。

「八木に関しては、そのほかにもエピソードがあるんだよ」

「まだあるんですか？」

「その一つは、開祖さまがいかに神さまのご命令に無条件に従われたか、という逸話
なんだけど」

「それはぜひ伺いたいですね」

馬淵が言った。

「ある時、開祖さまに帰神された良の金神が『直よ、外国へ行ってくれ』とおっしゃった。
すると開祖さまは素直にそのお言葉に従われ、五円のお金と一人のお供を連れて、綾
部を出立されたんだそうだ」

「えっ、ただ外国というだけですか？」

大地が驚いた声で言った。

「そうなんだ。外国がどこにあるのかも分からないのに、開祖さまは神命のまにまに
東に向かって進まれた」

「もちろん、徒歩ですよね」

馬淵が言葉を継いだ。

「そうです、歩いてですよ。で、この八木まで来られたら、突然神さまが『もうよい、帰れ』
と…」

「え、綾部からここまで歩いてきて、もう帰れ…ですか？ 殺生ですねえ」

「神さまは何かの『型』をさせられたんだろね。『ここは外国と神国との境、神界の立てわけ場所じゃ』との神示が降りたということなんだね」

「……………?」

大地は不思議そうな表情で首をひねった。

「ほら、八木という漢字は、八木の『八』を逆さまにして『木』にくっつけると『米』になるだろ。米に国をつけると…」

「米国……あつ、アメリカかあ!」

「で、開祖さまはそのまま綾部に帰られた…、というお話でした」

「ん〜、なかなかできないことですね」

ハンドルを握っていた北原もうなった。

初心不可忘

八木の町中を過ぎ、車中では昨夜の「えら歎きの座」の話題になった。

「歎きの座」とは一般的に聞き慣れない言葉かもしれない。講師を囲み、修行者それぞれが大道場修行を受講するようになったきっかけや修行の感想、信徒であれば入信の経緯や信仰体験談など、思い思いに語り合う、いわゆる座談会である。

一方的に講座を聞くだけでなく、同じ修行者の心の内に耳を傾けることにより、時にはそれが「き気付き」や「ま学び」につながることもある。あるいは、講座の中で疑問に思ったことや理解できなかったことをあらためて講師に問い、講座の内容をより深めることもできる。

大地自身もその場で、修行に來た経緯や三日間の感想を語ったが、大地には一人の女性の話が印象に残った。

「あの宮崎から来られているかけはし梯さんは、とつても良いお話をされていましたね」
「そうそう、印象的だったなあ」

助手席の馬淵も振り返りながらあいづち相槌を打った。

「信者さんじゃないけど、なんだか、とつても素直な女性でしたね」

「また、かけはし」という名字もいいよね。梯洋子さんでしたね」

運転しながら北原が言った。

「おい、つくらいでしようかね？」

「四十二歳って聞いたけどね」

「さすが丸山さん、しつかり情報キャッチしていますね」

「はい、任せなさい」

また丸山のトークの流れになり、しばらく梯の話題で盛り上がった。

昨夜の「飲ぎの座」の講師は、修行前夜の「修行の心得」担当だった竹田つた伝生おだった。神教殿の講座室で、机を円形に並べ、午後七時から九十分間、竹田が進行役になって、順に話を引き出していった。分割受講の修行者もあり、大地たちのような全日程の受講者と合わせ十人ほどだったので、一人の持ち時間は十分もなかった。丸山が相変わらずちよつとしゃべり過ぎの感があったが、おのずとムードメーカーの役目を果たしていたので、終始和やかな中での座談会となった。

大地たちが印象的だったという梯は、インターネットで大本のことを知って興味を

「持ち、〝自分探し〟のために大道場修行を受講したとのことだった。

「とても思い悩むことがあり、何か一つでも〝気付き〟をいただけたらと、正直、する思いを持ちながら亀岡に来ました。初めてのところで、少なからず不安な気持ちもあったのですが、不思議なことにすぐに溶け込むことができました。

そのきっかけは、二日目の講座前の鎮魂でした。以前お寺で座禅を体験したことがあったのですが、鎮魂の姿勢は初めてでした。ところが、八雲琴の音色を聞いているうちに、自然と涙があふれてきました。自分でも、どうしてそうなったのか分かりませんでした。もちろん悲しくて涙が出てきたわけでなく、自然と胸がいつぱいになり：私の魂が喜んでいいのかも：と、自分を客観的に見ているもう一人の自分がいるような、そんな気分でした。

また、万祥殿での朝夕拝で、ピンと張り詰めた神聖な空気の中で、皆さんと奏上する祝詞には心が洗われるようで、とにかく気持ち良くて、不謹慎かもしれませんが、
〝何だ、この快感は〟と思ったほどです。

とにかくこの三日間は全てが新鮮で、想像していた以上というか、予想を超えた充実した清らかな気持ちになることができたと思っています。講師の先生方や係の方々、それから皆さんにとっても親切にしてください、ありがとうございました」

梯は、大地たち修行者の顔を見回しながらお礼を言った。

「それは良かったですね。ところで講座の内容はいかがでしたか？」

竹田が質問した。

「お話の中では初めて聞く専門的な言葉もありましたが、講座は全てが私の心にすんなり入ってきたように思います。もちろん、内容を全て理解できたとは思っていませんが、何と云うのでしょうか、納得できたというか、抵抗なく心に響いてきた…という感じでした。大本の教えは、とても幅が広く、深いですよね」

「そうですね」

「梯さんは、朝拝前の万祥殿のお掃除を、とつても積極的にされているように感じましたよ」

丸山が感心したような表情で言った。

「積極的だったかもしれません。自分でも不思議だったんですが、普段は自宅でも仕方なく掃除をしていました。掃除をした方がいいかな…とか、しなくちゃいけないなあ…とか、いつもそんな気持ちで掃除をしていました。ところが万祥殿では、生まれて初めて“掃除がしたい”と思ったんです。

万祥殿のようなどても神聖な場所をお掃除させていただいているんだと思うと、
く、神さまはこんな私に、このような素晴らしい聖域に入ることをお許しくださった
んだ。ありがたい！」と素直に思えました。すると鳥肌が立つようで目頭が熱くなり
ました」

「梯さんは、聖地での出来事全てを、とても信仰的に感じておられる。きっと求める
心がそうさせているのでしょね」

竹田は梯の思いを噛みしめるように、頷うなずいた。

車はJ R 吉富駅前にさしかかっていた。

「丸山さん、あの梯さんの掃除に対する思いというのは、びつくりしました。というか、
自分の掃除に対する心構えが恥ずかしく思えたんですけど…」

大地が昨夜の梯の言葉を思い出しながら、横の座席の丸山に話し掛けた。

「まったくその通りだね。この私でも、初修行の時には、梯さんと同じ気持ちだが、若
干はあったなあ…、ということを思い出したほど、初心をすっかり忘れてしまっていた。

「初心不可忘、まさに初心忘るべからずでないといけないね」

「なかなか難しいことですけど、初心に帰ることは大切なことですね。私も梯さんの

掃除に対する思いを聞いて反省させられました」

馬淵が振り返りながら言った。

「余談だけどね」

そう言つて丸山は話を替えた。

「初心忘るべからず、というのは、能を大成した世阿弥の言葉で、一般的には『はじめの気持ち、志を忘れてはならない』という意味で使われるよね」

「そうですね」

大地が相槌あいづちを打った。

「実はね、初心忘るべからずには、もう少し深い意味があるんだよ」

「えっ、どういうことですか？」

「世阿弥がこの言葉を残した『花鏡』かきょうという伝書には、『初心忘るべからず』は三カ条

あるんだ。それは、

是非の初心忘るべからず

時々の初心忘るべからず

老後の初心忘るべからず

とあるんだね」

「三つもあるんですか？」

「そう、もともとは能役者が芸を極めるために必要なことを表した言葉の一つだということ、世阿弥は、能役者としての精進の段階で、いくつもの初心があると説いているんだね。」

若い時の初心、人生の時々の初心、そして老いてからの初心とあるんだ。しかもその初心は、はじめの気持ち、志が、つまり初志ではなくて、初心者の頃の未熟さやみつもなさ、とも言えるんだ。つまりは芸の未熟さ、みつもなさを折に触れて思い出すことによって、あの状態には戻りたくない」と反省することでさらに精進できるというんだね」

「なるほど」

「だけど、ついついそれが観念的になって、後悔先に立たずを繰り返しちゃうんだね…、私のように。」

三代教主さまはご自身で『わたしもこれ（初心不可忘）を座右の銘にしています』とお書きになっいて、三つの不可忘の戒めは能楽に限らず、宗教にも芸術にも、処世にも、全ての道に大切な心構えであって、大本人も信仰者としてこの戒めを常に呼び起こして、身魂磨きをするようにとおっしゃっている。そして、お筆先の『ぬきみ

の中にいるような心でいてくだされよ』というのは、初心不可忘のことだ…ともお示しになっているね」

「何だか深いお話ですね」

「今の私はまさに、老後の初心忘るべからず、つてとこだね」

「なるほど、じゃあ私は、是非とも初心忘るべからずですね」

「そうそう、そういうこと(笑)」

丸山が高笑いした。

車が園部の町中に入つてすぐ、丸山が左手の方に顔を向けた。

「この左手の方に、『生身天満宮』という大本とご縁のある天神さんがあるんだよ」

大地は、記憶の中にその名称を探した。

…確か。

「菅原道真が亡くなる前から、そこでお祀りされていたということで、日本で一番歴史の古い天満宮ですよね」

大地が言った。

「おや、よく知っているね。行ったことあるの?」

「いえ、以前祖父に話を聞いたことがあって…。生きているうちから祀まつられたっていうのが、妙に印象的だったので憶おぼえていただけです。それがここにあるんですね」

「雨宮君、たいしたもんだね。じゃあ、南陽寺のことも知ってるかな?」

「南陽寺? いえ、それは知りません」

「そうか。近くに南陽寺という曹洞宗のお寺があつてね。そこも大本とご縁があるんだよ。聖師さまは青年時代、園部で獣医学や牧畜の勉強をされていてね。その南陽寺に住んでいた国学者の岡田惟平これひら翁に師事されていたそうだよ。そこで岡田翁から、鎌倉時代に途絶えてしまった歌祭の由来や方法、歌垣の作り方などを学ばれたということだ」

「それは、明治中頃の話ですよね」

馬淵きが訊いた。

「そうですね、聖師さまが二十代前半の時です。聖師さまはそのことを長い間温めておられ、昭和十年に『大本歌祭』として、亀岡で復興させられ、第二次大本事件で断の後、昭和二十五年から、二代教主さまによって再び復活されたわけですよ」

「なるほど、そういう歴史がこの園部にあつたのですね。面白いな」

丸山の説明に、大地は歴史の流れを感じていた。

天満宮と天神さん

「丸山さんは歴史に詳しいんですね」

ハンドルを握る北原が言った。

「ホント、勉強になりますね。ほかにもまだタメになる話、ありますか？」

助手席の馬淵が訊ねた。

「皆さん、よく注意して聞いてくださいよ。私の話は、けっこう出任せかもしれないませんからね」(笑)

「えっ、でたらめってことですか？」

大地が驚いた。

「雨宮君、でたらめとは言っていますよ。で・ま・か・せ、です」

「出任せって、でたらめということじゃないんですか？」

「ちよつと違うかな。私の場合は、口から自然と、出るに任せる…ということですから、神さまのご内流のまにまにお話ししているということですよ」

「おっ、なるほど」

「いやいや、これはでたらめかも(笑)」

「え、どっちなんですか」

大地が反応すると、車内は笑いに包まれた。

「ごめん、ごめん…。じゃあ、おわびに雑学を一つ…」

「よっ、待ってました」

運転している北原がハンドルをたたいた。

「では…」

丸山は一つ咳払いをして話を始めた。

「さつき、園部の『生身天満宮』の話が出ましたね。菅原道真が亡くなる前から、道真公をお祀りしていた日本で一番歴史の古い天満宮だ…ということをお雨宮君が知っていましたね」

丸山が確認した。

「はい、祖父に聞いた話で、生きていうちから祀られていたということ…」

「そうだね。ということは、神社の創建は道真公が亡くなる少し前ということになる。

確か…、亡くなる二年前だったと思うけどね」

「そうなんですね」

「ところがね、全国には他にも天満宮と呼ばれる神社の中に、創建がそれより古いところもあるらしいよ」

「えっ、じゃあ、生身天満宮が一番古い天神さんじゃないということですか？ おじいちゃんがでたらめだったとは…」

大地は首をかしげた。

「いやいや、そうじゃなくて、雨宮君のおじいちゃんは正しいよ」

「どういことですか？ 丸山さんがでたらめ？」

「いや、正確に言うと、生身天満宮は、日本最古の天満宮ではなくて、道真公を祀った最初の神社として最古の天満宮ということ」

「つまり、もともとあつた天満宮に、道真公が亡くなって以降、合祀した神社もあるということですか」

馬淵が確認した。

「そういうことです。で、さっき雨宮君が生身天満宮のことを天神さんと言ったけど、天満宮のご祭神：つまり道真公のことを天神さんと呼んだことから、天満宮のことを、親しみを込めて天神さんと呼ぶようになったようだね。実際には“天満大自在天神”

という名前とか、いくつものご神名があるようだよ。だから今では、一般的に天満宮と天神は同じだと思われているみたいですね

「本来は違う神社だったということですか？」

「いろいろな説があるかと思いますが、道真公が祀られる前から天神社というのはあったんですね。古くは奈良時代創建の社もあるらしいんですよ。

それから、天神地祇^{てんしんちぎ}という言葉があるように、もともと天神というのは、地祇^{ちぎ}地の神に対して天神、天の神ですね。つまり地祇^{ちぎ}が国津神で天神が天津神のこと…。『天津祝詞』の天津神、国津神、八百万の神たちともに…の天津神ですね」

「丸山さん、話の腰を折るようですけど、天津神と国津神というのは、どう違うんですか？」

大地が訊ねた。

「そうだなあ、大道場修行中の雨宮君なら、こんな回答はどうかな。もちろんどちらも神さまだから目には見えないけど、お働きの立場や場所が違う。天津神は主に霊界でご活動の神さま方、国津神は主に現界でお働きの神さま方、ってとこかな」

「あゝ、なるほど、何となくイメージできました。ありがとうございます。で、天神

社のことですね」

大地が話を戻した。

「例えば京都にある北野天満宮は、全国に約一万二千社ある天満宮の総本社で、『北野の天神さん』と親しまれている神社でしょ。以前は北野神社とか天満天神と呼ばれていて、天満は『あまみつ』とか『そらみつ』と読んで、雨がみつる…雨がたくさん降るようにと願う雨乞いの神さま、つまりは雷の神さまということですね」

「面白いですね」

馬淵が興味深げに相槌を打った。

「実はこの話、京都大学の名誉教授だった上田正昭先生が、昔『おほもと』誌の座談会の中で話しておられたことなんだけど、すごく興味深かったんで憶えていたんですよ。歴史学の権威者の説だからたぶんそうなのでしょう。だからこの話は出任せでなくて、受け売りです（笑）」

「それなら間違いないでしょうね」

馬淵が笑顔で頷いた。

「ちなみに、その北野天満宮には、明治三十三年の鞍馬山くらまやまの出修の神事の時に、開祖さま、聖師さま、二代さまが参拝されているんですよ。そして開祖さまはその時に、道真公の不遇の晩年に触れられて、国祖・良の金神さまのご隠退のことを、涙をハラハラと落しながら語られた：ということなんです」

開祖さまの話題となり、丸山は急に真面目な顔になった。大地は、鞍馬山くらまやまの出修と聞いて、確か講座の中で聞いたような気がしたが、思い出せず丸山に訊ねた。

「雨宮君、そりゃあそうだよ。初日の『大本の出現』の講座の最後に、時間切れで項目だけ読んで終わりだったからね」

「なんだそうでしたか、憶おぼえてないはずですよね。よかった」

「あつ、居眠りして聞いてなかったのかも」

「いえ、そんなことは…」

大地は顔の前で手を振った。

「ついだから、天神さんについてももう一つ。京都の金閣寺の手前に『わら天神前』というバス停があるんだけど、それは近くに『わら天神宮』という神社があるからなんだね。正式名称は『敷地神社』というけど、京都では有名な安産の神さまで、妊婦

さんにお下げする安産のお守りの藁わらから、〃わら天神宮〃このって呼ばれていてね。

でも天神だけど、主祭神は菅原道真ではなくて、木花開耶姫命このはなさくやひめのみことさまなんですよ。

神社の起源が道真公の時代よりずいぶん前だから、主祭神は当然違ちがうわけですよね」

「なるほど、天満宮と天神さんは必ずしも同じでないということの実例ですね」

「そういうことです。でも、神社の起源や由緒というのは、古文書等ではつきり分かるものは別として、時代の流れで増えたり、人間の都合で変化した場合もあるようだからね。

道真公だつて、崇たり神として恐れられ、怒りを鎮めるために祀まつられたのが、そもそも始まりだつたわけですよ。それが時の流れの中で、道真公の優秀な能力にあやかりたいとして、民衆から学問の神さまとして崇あがめられるようになったわけですよ」

「ずいぶんな変わりようですね」

大地うなずが頷うなずいた。

「道真公は千年の間に待遇が逆転したけど、国祖の神さまは、三千年以上も悪神、崇たり神としてお隠れになり、世を忍んでこられたんですから、大変なことですよ」

「そうですよね。その三千年も、人の歴史の三千年とは違いますからね」

馬淵が小さな声で言った。

「さつき話した開祖さまの北野天満宮ご参拝の折の話…、開祖さまは国祖のご境遇やご艱難かんなんを偲しのばれて、その思いを語られたんでしようなあ。われわれのような凡人では及びもつかないようなご苦労をなさっている神さまのことを、開祖さまはわが身のように、いやそれ以上に痛切に感じておられたんでしょう」

しみじみと語る丸山は、さつきまでのひょうきんな表情と変わっていて、大地は丸山の信仰心の一端に触れたような気がしていた。

綾部へ

車は観音峠を越え、京丹波町に入った。頭上を横切る京都縦貫道の高架下を過ぎると、しばらく道路が片側二車線と広くなっている。

丸山の雑学によると、以前このあたりは渋滞することが多かったようだ。特に五月のゴールデンウィークや夏の海水浴シーズンには、丹後方面でのレジャー帰りの車で、京都方面へ向かう上り線がよく混んでいたとのこと。だが近年は国道の一部拡幅と縦貫道の整備で、渋滞することはほとんどなくなった。大地たちの車も綾部へ向かって、順調に走行している。

国道九号線は、片側二車線が終わるところで分岐していて、分岐点である京丹波町の「蒲生」交差点から右折して北に進路をとると国道二七号線となる。正確に言うと、そこが二七号の終点で、始点は福井県敦賀市である。

ちなみに大地たちが走っている国道九号線は、京都市下京区の「烏丸五条」交差点を起点に、山陰地方を経由して、終点の山口県下関市まで続く実延長六二・四キロメートルの長距離だ。国道四号、国道一号に続いて日本で三番目に長く、西日本では一

番長い一般国道である。

大地たちはそのまま国道九号線を直進した。聞くとどちらの道を進んでも綾部には着くようだが、直進し途中で国道一七三号線に入るルートの方が、二七号線を選ぶより五分ほど早いらしい。

「私が若い頃は、綾部へのルートは二七号線だけだったんですよ。でも、この先の一七三号線が綾部まで開通してからは、この道を通ることが多くなりました。でもね、二七号線を走る方が、景色はきれいなんだよ。特に五月のみろく大祭のころは、山々の新緑が本当に美しく、私は個人的にはそちらの道の方が好きでね…。二七号線から見ると遠く、山並みの新緑は、まるで聖師さまの耀盃ようわんを見ているようなんだなあ…。まあ、今は真夏だから、どちらの道もそう変わらないけどね」

「へえ、そうなんです。今度ぜひ見てみたいですね」

丸山の説明に大地が応えた。

国道九号線を直進した車は、そろそろ国道一七三号線との交差点近くまで進んできた。

「そうそう、この辺りまで来ると、また一つ思い出す話があつてね…」

丸山が左手の窓外に目を向けながら言った。

「どんな話ですか？」

大地が訊ねた。

「その昔、この辺りであつた聖師さまのすごいエピソードだよ」

「えー、どんなすごいことですか？」

「それはね…」

丸山は一呼吸置いてから話し始めた。

「この辺り一帯は昔、ひのき松山と呼んでいて、今はもうなくなつたけど、たる樽屋という旅館があつてね。聖師さまはその旅館をよく使つておられたそうなんです」

「こんなところに旅館があつたんですね」

「今走っている国道九号線は、山陰道と呼ばれる街道で、ところどころに宿があつたんですよ」

「なるほど、宿場のような場所があつたんですね」

「さつき八木のとら虎天堰で、聖師さまと開祖さまの次女・福島ひささんが出会って、聖

師さま…上田喜三郎青年が、初めて綾部の開祖さまを訪ねられた話をしたでしょ」

「はい、確か高熊山での修行をされたあとでしたね」

「明治三十一年の旧八月に、聖師さまは初めて綾部へ行き、開祖さまとご対面されたわけですね。

聖師さまは神さまから『一日も早く西北さして行け、お前の来るのを待っている人がある』と命じられて、八木でひささんに会い、綾部へ行かれた。一方開祖さまはお筆先を通じて神さまから『なおの力になる人をこしらえてあつて、そのお方をひきよせるから、何事でもたずねなさい』ということを聞かされていた。

つまりお二人は互いが“運命の人”であつたわけです。でも最初はすんなりといかなかつた」

「どういふことですか？」

「開祖さまが聖師さまに、『お前さんは何神さんでございますか？』と聞かれると聖師さまは当時、駿河の稲荷講社というところに属しておられたので、そのことを伝えられると、開祖さまは『この神さまはそんなところに世話にはなれない』とおっしゃつたということなんです。開祖さまのそばにいた役員が、怪しいやつが来たと反発し

たこともあって、この時、聖師さまはわずか二泊して綾部を去られたんです」

「では会談は物別れに終わった、ということですか？」

「残っている記述から、そんなふうに取りられることもあるようだけど、違うように受け取れるところもあってね…」

丸山はそう言って、以下の聖師さまの回顧歌集『霧の海』にあるお二人の初対面とお別れの場面を詠まれたお歌の概略を説明した。

三枚の半紙に筆先さらさらと

書きて開祖は吾われにたまへり

なんぢ汝こそ神のよさしの神柱と

しるしありたりかしこき筆先

今しば暫し時節ははやし時来れば

迎へに行かむと開祖は宣のらせり

「だから聖師さまは、開祖さまのお心を理解して、しばしお別れになった…とも取れるんですね」

「なるほど。で、聖師さまは、亀岡に帰られたわけですか？」

「いやそれが穴太の実家には帰らず、園部まで引き返されたんですね。おそらくそのことも開祖さまと別れられる時か、あるいは後日、所在を伝えておられたんでしょう。というのも、園部に滞在されている聖師さまの元に、開祖さまの指示で、綾部の四方平蔵さんからの手紙が届いているんです。

何と言っても聖師さまが帰られてから、お筆先に何度も聖師さまのことが書かれるようになったんです。開祖さまの力になるお方だとかね」

「そうなんですか。で、聖師さま…喜三郎青年は、園部で何をされていたんですか？」
助手席の馬淵が訊いた。

「知り合いの座敷を借りて、神さまのお道を宣伝されていたんです。だから聖師さまを信奉する人たちも増えていたようで、園部の町の有志は、信仰はともかくも地元の繁栄の一策として、園部の公園の中に布教所を建てて聖師さまを永住させようとしていたというんだね」

「そうすると、靈験あらたかだったということですね」

大地が確認した。

「そうだね。ところがそこへ綾部から開祖さまのお使いとして、先に手紙を出してい

た四方平蔵さんが、聖師さまをお迎えに来たわけですよ」

「あらら、それなら園部の人たちのもくろみは外れてしまったんですね」

「そうなるね。聖師さまは最初、『綾部はもうこりごりしましたから、行くのはやめま
すワ』と言われたようだけど、よくよく話を聞くと、開祖さまと平蔵さんが相談の上
迎えに来たらしく、反対する役員にはナイショだったというんだね。で、いろいろと
話を聞かれて、聖師さまも覚悟を決め、綾部行きを承諾されたというわけです。

それでなんとその夜、聖師さまは往復八里というから三十二キロの道を穴太の実家
まで帰られて、おばあさんやお母さんに綾部へ行くことを告げ、産土の神さまに祈願
をし、明け方までに園部へ戻ってこられたということなんです」

「何という健脚…」

「今の人にはできないことだね」

「そうですね」

「そのことは平蔵さんも知らなかったようで、二人はそのあとすぐに綾部へ向かって
出発されたわけですよ」

「なんと…」

「で、その日の夕刻に、さつき説明した^{ひのき}松山の^{やま}樽屋^{たるや}旅館に投宿されたというわけですよ」

丸山の説明に大地は無言で頷いた。

「さあ、二人が樽屋に入るとたちまちに大雨が降りだした。雷鳴轟き、ものすごい豪雨になった。そんな中、二人は夜中まで話し込み、午前四時頃に起床されたようだけど、相変わらずバケツをひっくり返したような大雨が降り続いてたんだね。で、平蔵さんが心配して雨が止むだろうかと聖師さまに訊ねると、聖師さまは『午前九時になればカラリと晴れます』と断言されたんですね」

「その時代、天気予報もないわけですよね」

「まだ夜も明けていない時だし、まさに大予言をされたわけです」
「へえ〜」

「それから聖師さまは、平蔵さんに不思議なことを言われるんですよ。一度も行ったことのない平蔵さんの家の周りの様子を言い当てられたんです。家の裏にきれいな水が湧くため池がある。前には枝ぶりのおもしろい松の木がある。近くには街道沿いに小さい店があつて六十歳くらいのおばあさんがいる…などとすべてピタリと当てられたものだから、平蔵さんはもうビックリ！」

「僕もビックリです！」

「でも平蔵さんはそれが稲荷使いじゃないかと心配するんですね」

「稲荷使い？」

「まあ、狐や狸のような低級な霊を使つて、超人的なことを予言したり当てたりすること……でもいうのかな。だからそんな芸当を綾部でやつてしまうと、開祖さまのまわりにいる役員らがまた大騒ぎすると心配したわけです。それで聖師さまに、綾部へ行つたらそんな魔法だけは使わないようにしてください、と頼まれるんです。

すると聖師さまが、そんな分からず屋ばかりなら綾部には行かない、と言いだされるものだから、平蔵さんはあわてちゃうんですね。今の時期は、綾部・和知川の鮎がおいしいだの、開祖さまのご内命で来ているので困るだのと、聖師さまを説き伏せられるんです」

「ここまで来て帰られたのでは、平蔵さんも開祖さまに合わず顔がない……ということになりますね」

「そう。で、聖師さまは狐使いや魔法じゃなくて、これは天眼通というものだから、それをあなたに授けましょう……ということになったわけです」

「おもしろそう！」

天眼通

大地は興味津々である。

…が、ちよつと待てよ、というような表情で、隣の丸山の顔をのぞき込んだ。

「あの〜」

「ん？」

「テンガンツウ…とか言われましたが、それはいったいどんなものなんですか？ 今伺った聖師さまと四方平蔵さんとのエピソードから、何となく分かるような気もするんですけど…」

「そうだよね、今の若い人たちには聞き慣れない言葉だよね」

「はい」

大地は頷きながら話を続けた。

「大道場の講座の中でも、大本独特の言葉があったりしますよね。あれって僕も初めて聞いた時には分かりませんでした。講師の先生が、その言葉の解説をしてくださると理解できましたが、講座の中でサラッと使われると…えっ、今のどういう意味？…」

って感じで、頭をひねってしまいました」

「そうだね。宗教用語…特に仏教用語だったり、大本独特の言葉だったりするからね」
「大本はどちらかというと神道しんどうですよ。なのに、どうして仏教の言葉が多いんですか？」

「仏教用語はお筆先の中にもいろいろあるけど、神さまはできるだけその時代の人々が理解しやすい言葉、あるいは時代を超えて親しまれている言葉を使われたんじゃないかなあ。そうしないと、雨宮君と同じように、みんながまったく知らない言葉だったら誰も理解できないからね。

『靈界物語』の中にも時々『かみよ神代言葉』が出てくるけど、それだけ読んでもチンプンカンプン。まあ、聖師さまが解説されているから分かるけど、そうでなければ、現代人にはまったく意味不明だからね」

「そんな言葉があるんですね」

「だから神さまは、少しでも靈界や神さまのことが人民に伝わるように、一般的に分かりやすい言葉を使われたんだと思うわけ。…って、私も先輩に教えてもらったんだけどね。受け売り、受け売り…(笑)」

丸山が笑顔で答えた。

「なるほど、そうなんですネ」

「大本では、理想世界、地上天国のことを『みろくの世』と呼んでいるけど、仏教でいうみろくの世はちよつと違うんですよネ」

助手席の馬淵が言った。

「そう、馬淵さんはよく分かつてるんじゃないの」

「あつ、いや、そんなに詳しくはないんですが…。仏教のミロクの世は、昔、世上で盛んだつたミロク信仰に由来してますよネ」

「はい。馬淵さん、続けて…」

丸山が馬淵に話を続けるように促した。

「丸山さん、間違っていたら訂正してくださいね」

「いやいや、自信をもってどうぞ」

丸山は馬淵を促し、馬淵もまんざらではない表情で語りだした。

「日本でのミロク信仰は長い歴史があるようで、仏教が日本に入ってきた五世紀の後半から、すでに始まっていたらしいですね。」

簡単に言うとお釈迦さんが入滅後：つまり亡くなつてから五十六億七千万年のこの世に、弥勒菩薩がこの世に下生して世の人々を救うという、一種の救世主信仰ですね。

高野山を開いた空海も、自分は死してのち、弥勒菩薩の浄土である兜卒天に生まれ衆生を見守り、釈迦入滅から五十六億七千万年後に、弥勒菩薩と共に下生して衆生を救うんだと誓願していたそうです。

世の人々は、お釈迦さんが入滅してから弥勒出現までの間、仏のいない世界になることを恐れて、現世を救うさまざまな仏さまを考えてきたということのようです。ですから、空海：弘法大師は亡くなつたのではなく、今の高野山の“奥の院”で生き続けていると信じられているんですね」

「だから、弘法大師を慕う人々がこぞつて奥の院にお墓を建てたんですね」

「そうなんです。一度高野山の奥の院に参拝したことがあるんですけど、もうびっくりしました。一番奥の弘法大師の御廟までの広大な場所に、二キロメートルの道があつて、その両側に、なんと二十万基を超えるお墓があるんです」

「えゝ二十万！ そんなにあるんですか？」

大地が驚いた。

「お墓といつても、遺骨を納めたものだけでなく、祈念碑や慰霊塔なんかもたくさんあるんですよ。昔の諸大名の墓石もあれば、現代の大手企業関係者のユニークな慰霊碑なんかもあって、ちよつと別世界でしたね」

「いつだったかNHKの『ブラタモリ』で紹介していましたね。確か戦国時代のライバルだった上杉謙信と武田信玄の霊廟れいびやうというか供養塔も近くにあるとか…。

おつ、また何だか話がそれちゃったかな」

「すみません」

馬淵が小さく頭を下げ、話を戻した。

「仏教用語のことでしたね」

「はい」

大地が返答した。

「そうそう、『おほもとしんゆ』に『変性男子』へんじやうなんしというのがありますが、これも仏教用語ですよ、丸山さん」

馬淵が丸山に訊いた。

「はい、大本では『変性男子』へんじやうなんしは開祖さまのことで、肉体は女性だけど身魂みたまは男性…」

丸山が補足した。

「でも仏教用語には、その反対の『変性女子』という言葉はないらしいんですが、『おほもとしんゆ』には出てきますね」

「大本では『変性女子』は聖師さまのことだと、講座で教わりましたが…」
大地が言った。

「その通り。でも仏教用語では、『変性男子』だけ。これは古来、女性は成仏することがとても難しいとされて、いったん男性になること、つまり性を男子に変えることで成仏することができるようになるとした、一種差別的な思想からきている言葉のようですね」

「へえ、そういうことなんですか。じゃあ、大本で使っている意味とはずいぶん違うということですね。知らなかったな」

運転中の北原が感心したような声で言った。

「すごいなあ、そういうことですか」

大地もしきりに頷いていた。

「丸山さん、みろく」という言葉は一般に仏教用語として使われてきたわけですけど、本当は違うそうですね」

馬淵が訊ねた。

「そうなんです。実は聖師さまも、みろくの世という言葉何を何とか神道風に代えられないかと思っておられたんです。そこで開祖さまにお伺いされ、開祖さまも同意されて神さまにお伺いされたそうです」

「それで：？」

「すると神さまは、ミロクというのは神さまがお釈迦さまを通じて発せられた神の言葉である」とおっしゃったそうだよ。みろくとは、いよいよ革める力、はたらきのこと。だとも聞いています。

：あれ、何の話からこうなつたかな？」

丸山が首をひねった。

「すみません、天眼通の質問からです」

大地が答えた。

「はいはい、そうだったね。え、天眼通というのは、何でもできる靈妙な力：神通力の一つだね。これも菩薩に備わる特殊な六つの能力：六神通というのがあって、その一つ。ある物に対して普通の人が見ることができないことを、自在に見透かす特殊能力のことですなあ」

「ということとは、透視能力ですね」

「ん、ちよつと違うかもしれないけど、まあ、そういうことかな」

「なるほど。で、聖師さまはその力を持つておられたんですね」

「そういうこと。行ったこともない四方平蔵さんの家の様子を言い当てたエピソードが、まさに天眼通^{てんがんつう}。しかも、聖師さまはその力を平蔵さんに授けられるんですね」

「でも、特別な人が持つ特殊能力なんですよ。普通の人が簡単に会得できるものなんですか？」

「アハハ、平蔵さんも今の雨宮君と同じことを聖師さまに訊^{たず}ねているね。私のような素人でもそんな天眼通^{てんがんつう}ができますか？」 ってね」

「やっぱり」

「すると聖師さまは平蔵さんに、『天眼通^{てんがんつう}くらいは、すぐに分かるようになる』と言つておられる。ただし『真心になりさえすれば』という前提があつてのことだけだね…。

平蔵さんは素直な人だったんでしょう、聖師さまが言われるままに、座敷の真ん中に座つて、目を閉じて手を組んでみた。そして聖師さまが『それ見い！』と大声で言われた途端、目を閉じているのにもかかわらず、風景が浮かび上がってきたんですね」

「どんな風景だったんですか？」

「きれいな水が湧く池の近くに、古くて小さな藁葺きの家があつて、裏には大きなカヤの木なんかがあつて……と見えた風景を細かに話されたんです。すると聖師さまは、それは自分が生まれた家だ、とおっしゃったんですね。つまり聖師さまは、ご自分を平蔵さんに見せられたわけです」

「へえ、そんなこともできるんですか。天眼通、恐るべしですね」

「だから、天眼通を授けられた平蔵さんは大喜びですよ」

「そりゃあ自分が特殊能力を身につけられたんですから、嬉しいですよね」

「いやいや、そういうことじゃなくてね」

「えっ？」

「平蔵さんは、『開祖さまは偉いもんだ』、と喜んだんですよ。というのも開祖さまが、大勢の役員や信者に隠れて、喜三郎青年をお迎えしてこいとおっしゃっただけの価値がある……だから、この青年だったなら神さまのご用が十分に務まるだろうと確信できたから、とつても喜んだということですよ」

「なるほど、平蔵さんつてよっぽど素直な人だったんですね」

大地が笑顔で言った。

「そうかもね。で、その後、二人は朝食をすませて準備をし、いざ綾部へ向けて出立となったんです」

「あっ、ひよつとしてその時間が、予言された午前九時ということですか」

大地が丸山の顔を見た。

「その通り！ それまで降っていた大雨がウソのようにピタリと止み、日本晴れの空が広がり、太陽が燦々と輝きだした。平蔵さんにとつては不思議なことの連続で、もうすっかり聖師さまにまいってしまったわけですよ」

「まさに予言通り、すごいエピソードですね」

大地は感心しながら何度も頷いた。

(続く)